
planet

ほげほげお

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

planet

【Nコード】

N6932N

【作者名】

ほげほげお

【あらすじ】

初めての投稿テストです。

コンピュータ関連のSFのお話。

とりあえず完結できるよう作った後、まともな文になるよう推敲したいと思います。

つたない文ですがご容赦ください。

1 - 1

1 - 1

息が苦しい。もう10分以上走り続けている。

少年の足がもつれた。強引に前へ進んで体勢を戻したが、疲労で足がまともに動かない。

低い植え込みの先に開けた道路が見えた。道路へ出れば誰がいるかもしれない。

全力で植え込みの上を飛んだ。左足が思ったよりも上がらず、植え込みに左足が掴まれたようにめり込み、バランスを崩して道路へ突っ伏した。左ひじを強く打ち付けたが、左手全体の感覚が麻痺して何も感じない。

植え込みの先の道路は、片側で3車線ある広めの道路だった。遠くまで見通せるほど開けていたが、誰一人いる気配がない。街灯も全て消えてしまっていて、遠くで炎上しているタワーマンシヨンの光がかるうじて届いているが、それでも十分な明るさには程遠かった。

急いで立ち上がろうとしたが、途中で足の力が抜け、再び地面に突っ伏した。太ももに力が入らず、ひざが変な方向へ曲がってしまった。

息と脈が今まで体験したことのない速さになっていた。

植え込みから、巨大な影が少年の前へ飛び出した。

虎だった。

ただの市街地で、虎が、少年を追いかけていた。

恐怖で叫んだ。

虎のうなり声が、ゆっくりと強くなっている。

心臓の鼓動が痛いほどに強くなった。

全身に力が入らない。虎から視線が離せないまま、呼吸がどんどん速くなり、耳鳴りがどんどん強くなっていく。

虎のうなり声がとまり、ゆっくりと、虎の口が開いた。
少年の意識が飛んだ。

1 - 2

1 - 2

真っ白な物体が、明かりが消えた上空を高速で飛行していた。
人のように見えた。

真っ白なコートと、コートと一体化した真っ白なフードをかぶっている。顔には大き目のガスマスクが装着されていた。

人影の右手が、何もない空間をキーボードを打つように叩いた。
叩かれた空間に、15インチ程度の半透明な画面が飛び出し、フラッシュしている。

表示されたモニタの左側で、小さな赤い点が点滅していた。

「006-D」

軽く上げた左手の甲から、小さな白い球体が浮き上がった。

「12-87番地区の消火をお願い」

白い球体が入影の左手を2回ほど周ると、真っ黒な地面めがけて
高速で飛び去った。

小さなため息が聞こえた。

モニタには、炎上地域を示す赤い点はまだかなりの数表示されている。消火が完全に終わるまでにはまだ相当な時間がかかるのは間違いない。

小さなアラートがなった。

「006」

男性の声がモニタから流れてきた。

モニタに小さな枠が表示されていた。同じデザインのガスマスクをつけた男がこちらを覗いている。

「今大丈夫か？」

「何かあったの？」

「12-922番地区付近で、人間型データの反応があがった」

「人間型データ？」不審げに答えた。「いつの情報？」

「5分くらい前だな。突然人間型データの反応がログであがった」通信枠の隣に、人間型データの出現ログが表示された。

確かに5分ほど前だ。

「少し離れてるんだが、移動時間的にはお前が一番近い。高確率で不正をやってる連中とは思うが、万が一エラーか何かでデータが起動した正規データだったら困る。見に行ってくれ」

男の説明を受けながら、視線はモニタに映る赤い点を見ていた。

「今このあたり一帯の消火作業をやってるんだけど、消火作業遅れても大丈夫？」

「データ確認を優先で頼む」

「実際その人間型データが見つかって、チーターだったら場合はどうすればいい？」

「処分で」

「正規データだったら？」

「強制停止して回収」

「了解。詳細情報をこっちに送って」

通信枠が閉じられた。

モニタに表示されている地図の一部を叩いた。指で叩かれた部分が拡大され、エリアの詳細が拡大されていく。

かなり拡大された地図に、12-922番というラベルが表示された。

表示されたエリアにも赤い表示個所広がっている。おそらくここも炎上しているのだろう。

飛行速度を上げた。

12-922番地区に近づくにつれ、大型のタワーマンションが目に入った。

タワーマンションは、遠目から見ても一見してわかるほどに激しく炎上していた。近づくにつれ、白いコートにつく黒点の量が加速

度的に増えていく。こんなところまでさすが吐き出されているらしい。

ガスマスクのゴーグル部についたすすを、軽く手で払いのけた。タワーマンシヨンは12-922番地区の外れに建っている。中央部分ではないが、明かりが消えて真っ暗な中、炎上し強い光を出しているタワーマンシヨンが、12-922番地区の場所を示す目印代わりになっている。

アラート音が鳴った。マップに目的地に着いたことを示す文が表示されている。すでに12-922番地区に入っているらしい。いったん空中で停止した。

まだタワーマンシヨンまで距離があるが、すでに非常に空気が熱い。何の装備もなくこれ以上マンシヨンへ近寄るのはやめておいた。熱のせいで後々何かしら問題がでくる可能性がある。タワー付近ではおそらく相当な熱さになっているはずだ。

右手側に表示されているモニタを叩いた。先ほど送信された情報が一覧化し表示されていく。

ここから南南西に1kmいった先の広場付近で、一人の人間型データーが発見されたようだ。幸いタワーからは若干離れた方向になる。熱の影響はあまり受けていないかもしれない。

急いで南南西へ飛んだ。すぐに開けた広場が視界に入ってきた。おそらくこの広場の付近だろう。

一瞬、眼下の状況を見て唖然とした。無意識に空中で停止している。

広場のわきの道路で、どうみても虎に見える動物が、真っ白な杭のようなものに貫かれた形で地面に縫い付けられたまま硬直している。

その隣で、小学生くらいの少年がうつ伏せで倒れていた。

一瞬間があいた後、急いで地面へ着地した。

「006-E、F、G、H」

左手の甲から小さな白い球体が四つ浮かび上がった。

「006-Eはこの子の、006-Fはこの虎のデータ収集をお願い。GとHはタワーの消火にあたって」

四つの球体が腕を離れ、二つの球体はタワー方面へ高速で飛び立った。残り二つは、それぞれ目の前の少年と、硬直している虎の周りを、白く発光しながら高速で回転している。

虎を見上げた。

やはり虎だ。虎の背中を、真っ白に光る杭が、後ろから貫いたように地面まで貫通したまま、指一本動かさずに硬直している。

このあたりに虎がいる理由がわからないが、考えるのはやめることにした。データがそのうち取れるだろう。

眺めの乾いた電子音の後、少年を調査していた白い球体が元の左手へ戻りくるくと回った。

モニタの情報枠に新しいログが流れている。

流れてくる情報を目で追っている最中、ログの出力が止まった。

モニタを軽く叩いた。フリーズしたわけではない。反応はある。

だがログがそれ以上流れない。IDの欄が表示されず、それ以降全てが止まっている。

ログが表示されている枠と、もう一度モニタを軽く叩いた。やはり枠だけが動かない。IDの欄が空白になるのは今まで見たことがなかった。

モニタの別の箇所を叩いた。ガスマスク男と連絡をとるための枠が開かれていく。

一瞬、地面に伏せていた少年の右手が、かすかに動いた。

「006-E!」

瞬間的に叫んだ。

「拘束!」

白い球体が一瞬で長いひも状に変化した。まるで意思を持つかのように少年の手首にまきつき、左右の手首を縛り上げ、空中へ吊り上げた。

「が」

少年からくぐもった声が上がった。

「006-I」

白い人影の左手から新たな球体が出現した。

「補足体制で待機」球体が左手の周りを回転し続けている。

苦痛で顔をゆがめながらゆっくりと目を開いた少年の顔が、目の前に立つガスマスクを見た瞬間、一瞬で凍りついた。

「誰？」

「今から質問をします。正直に回答してください」

「ちよつと、待つて」

少年の声がかすれている。吊り上げられた関係で、肺がうまく動かないのだ。

轟音が鳴った。また何か大きなものが地面に落ちた音だ。音に驚き、少年が後ろを振り返った。

「うわ！」

少年が叫んだ。

先ほど自分を追いかけていた虎が、今にも飛び掛りそうな格好で、白い何かに貫かれたまま硬直している。

「虎が！虎が襲って来る！」

「質問します！回答するように！」

白い人影が左手を前に突き出した。同時に少年から小さなうめき声が漏れた。突き出された左手に応じるように、手首を拘束している白い縄のようなものがさらに強い力で手首を縛り上げる。

「虎は今調査中です。それより質問に答えて。あなたは誰なの？
どうしてここにいるの？」

「待つて」少年が小さく答えた。「全然わかんないんだけど」
ガスマスクの中で、人影がため息をついたように見えた。

「オツケー。いい？私はこの管理者でAdmin-006番。
今Planet内部で無差別に発生している火事の消火作業をしています」大きく息を吸った。「質問にきちんと答えなければ、データ保護の保障はしません」

「Planet?」

「え?」

「Planetって何?」

両者の間に沈黙が流れた。

「あなた名前は?」

006番と名乗った人影が少年に聞いた。

「名前」少年がつぶやいた。「あれ?」

006番がモニタを確認した。枠内で出力されているログには、名前の表記は見当たらない。

ログに名前が表示されないケースなど初めてだった。

「名前を忘れてるとか、ありえないでしょ」

006番があきれたようにつぶやいた。

「データが欠損してる?それで記憶がない?」

「どういうこと?」少年が質問した。

「こつちが聞きたいわよ」

006番が左手を回転させた。

「うわ」

少年の腕を吊り上げていた力が急に消えた。そのまま地面に落ち足がついたが、突然の着地にうまくバランスを取れず軽くよろけた。

「このままここで動かないで。わかった?」

モニタの一部を叩きながら、006番が少年へ命令した。

少年がたじろぎながら頷いた。

モニタに通信用の枠が表示され、接続中という文字が表示される。少年が息を大きく吐いた。警戒を解いてはいないが、若干表情を緩ませた。状況はまったくわからないが、多少安心できる状況になっている気がした。

少年の視線の先で006番がモニタを叩いている。管理者と名乗ったガスマスクの人物は、声を聞くにはおそらくは女性だろう。コートでラインが隠れているためわからないが、体格もいいようには見えない。

「うわ！」

突然、何かが少年の足首を掴んだ。

地面を見た少年の顔が引きつった。

足元に、真つ暗な穴が広がっている。黒い地面から突き出たように伸びた手が、少年の足首を掴んでいた。

気味の悪い感覚が襲ってきた。まるで落とし穴に浮いているような状況だが、確かに足は地面を踏んでいて、落ちるような気配は何もない。見ているものと感覚がまったく合っていないのだ。

「006-E！」

声を聞いた006番が、反射的に左手を突き出し叫んだ。

瞬間、006番が後ろへ倒れこむように吹き飛んだ。

何かが006番の顔をめがけて直撃した。衝撃でガスマスクが弾け、ゴーグルの破片が空中へ飛び散った。

「おい！」

少年の声に反応しないまま、006が頭から地面へ倒れた。

火薬の臭いがした。足元を見た少年の視界に、銃口から煙を上げている小さめの拳銃があった。

「なんだこ」

掴まれた足を振りほどき逃げようとした瞬間、強い力が少年の足を引き込んだ。

一瞬で少年の姿が穴へ飲み込まれた。

「待ちなさい！」

額から流れてくる血を手で抑えながら、006番が起き上がり叫んだ。

地面に開いていた穴は、すでに何もなかったように閉じられている。

掴みかかるように少年の消えた場所へ走りよった。

「006-E！その子を持ち上げて！」

何のリアクションも返ってこない。穴と一緒に縄も持っていかなかった。

「006-I!対象を補足して!」

球体は主人の声にも反応しなかった。補足対象が見つからないのだ。

「おいどうした」

モニタから声が聞こえた。ガスマスク男の声がモニタに表示されている。

「006。何があつた。応答しろ」

炎上中のタワーマンションから、燃え崩れた外壁が剥がれ、轟音をたてながら地面へ落ちた。

006番は地面を見つめたまま動けなかった。

額から流れてる血が地面へ落ちた。

1 - 3

1 - 3

強く引きずり込まれた。

足は確かに地面を踏んでいたはずだったが、掴んでいた腕が足を引き込んだ瞬間、何の抵抗もなくなったように地面に沈み込み、飲み込まれるような感覚が続いた後、突然尻餅をつくような形で地面に落ちた。

尻が痛くて小さく呻いた。

「大丈夫か？」

突然、馬の被り物を被った男が、少年の頭上から少年の顔を覗き込んできた。

「うわ！」

横に飛び跳ねた。

「何だお前」

「ああ」馬面が両手を横に振った。「悪い悪い」

よつこらしよ、と、気楽な声を上げながら、被り物を脱いだ。中から、髪を茶色に染めた高校生くらいの少年が出てきた。

「これさあ、顔見えないから便利なんだよね」

息苦しいんだけど、といいながら、馬の被り物を手で丸めていく。予想外にピンポン玉サイズにまで圧縮された後、持ち主のポケットへ無造作に突っ込まれた。

「俺大介。お前は？」

「え」

「名前名前」

間が空いた。

「あー」大介が口を開いた。「大丈夫、俺敵じゃねーから」

突然、大介が右手の親指と中指をはじいた途端、空中に小型の冷

蔵庫が出現した。

重めの音をたて、冷蔵庫が地面まで落ちた。

啞然とする少年を尻目に、大介は冷蔵庫の前にしゃがみこみ、鼻歌を歌いながら扉を開けて中に入っている飲み物を選んでいる。

「お前何か飲む？」

大介が聞いた。

「え？」

「炭酸系でいいっしょ」

適当に手前に置いてあった缶を取り、少年に向かって軽く投げた。少年が反射的に自分に向けて投げられた缶を掴もうとした。

が、缶が受け取ろうとして突き出した右手に当たり、はじかれて地面に落ちた。

「ええー」大介がありえないものをみたような顔をし「どんくせーなあ」

「縛られててうまく動かせないんだよ」

少年が腕を突き出して文句を言った。

少年の両手首が、白い縄のようなもので縛られている。

先ほどの管理者とか言うガスマスクにつけられたものだ。

大介がペットボトルのキャップを開けた。

「お前さあ、その腕縛ってる縄つけた奴、どんな奴か知ってる？」

「いや」少年が口ごもった。「なんか管理者がどうのとかいってたけど」

「そうそう」大介が少年を見た。「あれ管理者アカウントなんだよ。お前、あのままあいつに捕まったら、たぶん消されてたぜ」

「消されてた？」

「データ消されて存在消滅」

「どういうこと？」

「だからー」手をひらひらさせた。「死ぬってこと」

大介が注ぎ口から口を離し、ゆっくりと立ち上がった。

「まあ、ということで、俺はお前の命の恩人ってわけよー」

感謝しろよー？といいながら、大介が大げさにポーズをとった。
何がなんだか、という表情で少年が見ている。

数秒ポーズをとっていたものの、少年の反応のなさに諦めたのかバツが悪いのか、大介はまた座って飲み物を飲み始めた。

大介がぶつぶつ文句を言いながら冷蔵庫を覗き込んでいる間、少年は周りを見回した。

何かのテーマパークにありそうな、岩壁で補強された細長い通路のように見えた。二人がいる狭い範囲だけ、何かの明かりに照らされているが、それ以外の離れた場所は、暗くて何も見えない。

「んで、話戻るけど、お前名前なんていうの？」

「名前」

少年が口ごもった。

「わかんない」

「は？」

「俺、名前っていうか、なんていうか」

「なんていうか？」

下を向いたまま、少年は無言で何も答えなかった。

「話したくない、と」

「違う、そうじゃない」

少年が大介を見た。

「別にそんな理由じゃないんだ。なんていうか、どういえばいいのかわかんないんだけど、俺、自分のこともよく思い出せなくて」

「はあ」

大介が自分の頭を無造作に掻いた。

ペットボトルの中身を一気に飲み干し、地面に落として足で潰した。

「まあ、なんつーか、とりあえずちょっとついてこいよ。お前一人でいたら、またあんなのに捕まって消されるぜ」

大介を先頭に、岩壁でできた通路をゆっくりと進んでいた。

左右の壁はむき出しの岩でできているが、人が通るには十分な道だった。地面も多少の凹凸があるものの、注意していれば転ぶようなことはない。どこが光源なのかはまったくわからないが、不思議と明るい箇所が二人の位置に合わせるように動き、真つ暗な道の奥も二人が進むにつれ照らされている。

「予想外だったなあ」

前を歩く大介が、ポケットから小さなスナック菓子の袋を取り出しながらため息をついた。

「まいっか」

「何が？」

「俺さ、お前もチーターだと思ってたんだよ」

「チーター？」

「不正データ」スナック菓子の袋を開け、少年に向けて差し出した。「お前も食う？」

差し出された袋に「激辛納豆チョコ味」と書かれてある。

見るからに嫌そうに手のひらを横に振った。

「実はやっぱチーターでしたー、ってオチで、データかなんかにエラー起こしてて記憶が飛んでますー、とかそういう方向性だったらいんだけどなあ」

スナック菓子を口に放り込みながら、大介が独り言をいつている。「そういうオチになってくんねーかなあ」

「あのさあ」少年が独り言に割って入った。「ここってさ。どこ？」

「この場所の位置？」

「いや、位置じゃなくて、なんていうか、全体的に」

「全体的？」

「さつきさ、俺、なんか虎に追いかけられたんだよ。虎に」

「虎までできたか」大介が笑った。「冗談とかじゃなくて」少年が強く言った。「なんかさ、いきなりなんで虎がいるのかとかもわかんないし、っていうかなんで助か

ったのかもわかんないんだけど、周りは周りでマンションがすげー燃えてたりするし、もうなんか全然わけわかんない」

「お前さあ、もしかして」大介が少年を振り返った。「ここがplanetってこと自体もわかってない？」

「planet？」

「ええー」大介が大げさにつぶやいた。「お前ほんつとに、ぜんぜん記憶ねーのな」

「ごめん」

しょうがねえなあ、とつぶやいて、また歩き出した。

「ここはplanetっていつて、コンピュータでできた空間なんだよ」

「コンピュータでできた空間？」

「そうそう。現実じゃねえの」

「現実じゃない」

「といつても、俺はビジターつつつて、現実にはちゃんと俺がいて、ここにはデータとして遊びに来てるだけなんだけどな」

「はあ」

さっぱり、といわんばかりの声だった。

「なんも覚えてないんだったら、いきなりこんなこと言われても全然わかんねーよなあ」

スナック菓子の袋を口につけ、一気に袋の中身を口の中へ流し込んだ。

「ついたついた」

大介の足が、何もない場所で止まった。

「ここ、入り口なんだよ」

何もない岩壁を軽く叩いた。

ノックを受けるかのように、岩壁の中間、大介の腰あたりの場所から、よくある見慣れた形のドアノブが突き出てきた。

突き出たドアノブを軽くひねると、ドアの輪郭のような形で岩壁に亀裂が走っていく。

ゆっくりと岩壁のドアが押し開けられた。

「まあ、とりあえず中に入れよ。いろいろ説明すつから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6932n/>

planet

2010年10月9日21時39分発行